

1960年代田辺地方における音楽文化発展に関する一考察

——文部省オペラ「手古奈」の上演を中心として——

嶋田由美・那須祐哉

1. はじめに

文部省は戦後、青少年の音楽文化育成運動の一環として、「青少年が楽しみながら上演出来る歌劇の台本を作る事」¹を目的として社会教育局内に青少年音楽研究会を組織した。この研究会が母体となって創作されたオペラ「手古奈」は1955（昭和30）年6月2日、東京一ツ橋講堂における第3回「青少年音楽指導者講習会」で発表され、その後、瞬く間に全国に広がった。そして、青少年のための創作オペラの代表的な作品としての地位を占めるに至り、現在においても高等学校のクラブ活動や市民団体によるオペラ上演時にしばしば採り上げられる演目となっている²。

この文部省による創作オペラの運動は、青少年の音楽文化の活性化に一役を担った以外に、地方におけるオペラ研究会の結成にも寄与した。例えば、1959（昭和34）年頃には、札幌、青森、山形、岐阜、山梨、大阪などの各地で、「青少年オペラ研究会」が誕生していた模様である³。このような各地におけるオペラ上演に向けた動きは、戦後の地方における音楽文化の発展にとって、大きな意義をもたらしたと考えられる。

和歌山県下でも1960（昭和35）年9月に、田辺地方で初となるオペラが上演されたが、この時の演目も文部省が創作した「手古奈」であった。加えて、上演に際しては、文部省社会教育局芸術課の一員として青少年音楽研究会を組織し、最初のオペラ「手古奈」創作を意欲的に推進した小林源治自身が関与していた。

この田辺地方は、戦後一貫して音楽活動が盛んな地域として県下でも広く

認められており、とりわけ合唱活動では県下の音楽水準向上の牽引的役割を担ってきた地域である。こうした田辺地方における音楽文化の発展は、まさに文部省が意図した地域の青少年による音楽文化育成活動が具現化されたものであると言える。その背景には、田辺地方の音楽関係者が一丸となったオペラ「手古奈」の上演も大きく関わっていたと推察される。そこで、本論では、文部省オペラ「手古奈」の上演を中心として、1960年代における田辺地方の音楽文化発展の様相を明らかにし、その考察を通して地方における音楽文化発展のための示唆を得ることを目的とする。

2. 1960年前後の田辺地方の音楽文化の状況

1) 音楽文化発展の素地としてのメディアの発達

①ラジオ・テレビ放送受信のための市民運動

田辺地方は、第二次世界大戦以前から電波の谷間という地理的環境により、ラジオやテレビの聴取が困難な地域であった。戦後もこの環境が大きく変わることはなく、市民から不便さを解消してほしいとの声が出てきた。

1946（昭和21）年、田辺市長であった那須孫次郎を会長として「県放送文化協会田辺支部」が設立され、ラジオ聴取状況の改善のために中継基地設置の運動を開始したが、市の経済難のため、これらの事業はなかなか実現に至らなかった。そこで、単独ではテレビの中継放送局を設置するのは難しいと判断した田辺市は、他の地域にも呼びかけて積極的に運動を展開し、その結果、1957（昭和32）年になって漸く、田辺放送局が設置されることになった。この中継所には大阪から2人の職員が派遣され、同年5月よりNHK第1放送の電波中継が開始され、翌年1958（昭和33）年には第2放送の中継も始められた⁴。中継所の設置によって、ラジオの聴取はそれ以降、次第に改善されていった。

一方、テレビに関しても田辺地方にとって、電波状況の問題は大きく、またテレビの価格の問題もあり、1950年代半ばのテレビの普及状況は、

田辺市は、テレビ電波の谷間となり、視聴はほとんど不可能であったが、一部の電器業者は付近の高地にアンテナを装置して不鮮明ながらも何とか

視聴できる程度にした。それでも一般市民は高価なテレビに手が及ばず、電気商の店先で見るくらいに過ぎなかった⁵。

というものであった。

このような中で、1959（昭和34）年3月のNHK徳島テレビ、同年4月の民間の四国放送テレビの開局は田辺地方のテレビ普及にも影響を及すものであった。また、1964（昭和39）年8月には田辺テレビ放送会社が高雄山頂に共聴アンテナ設備による共聴施設を作り、12月にはNHKが白浜平草原にUHF放送テレビ中継用鉄塔を完成させ、これによって家庭でも極めて鮮明な映像でテレビを楽しむことができるようになった。加えて、教育テレビも視聴できるようになり、これにより学校教育におけるテレビ利用も開始された。さらにNHKは1967（昭和42）年4月にラジオFM放送の中継所を建設、開局したが、これは、県下では和歌山市に次いで二番目の開局であった。FM放送の受信が可能となったことについて『田辺市誌』には、「田辺市も都市並に高度な音楽放送が聴取できるようになった。」⁶と記されている。

以上のように田辺地方は音楽文化を支える一端であるラジオやテレビの聴取や受信に関して決して恵まれた環境にあったとは言えなかった。しかし、逆にその環境が一般市民の報道に対する意識を高めることにつながり、より良い環境への憧れを抱かせ、そのことが、田辺地方における文化発展のための諸活動の原動力になっていたのではないかと考えられる。

②『紀伊民報』と「紀伊民報文化事業団」

戦後、復興が進み混乱が落ち着いた頃、田辺地方では次第に芸術的な音楽に触れたいという気運が高まってきた。しかし、当時の田辺地方には一流の音楽家を招聘できるほどの力を持った組織が無かったため、そのような演奏会を開くことは不可能であった。このような状況の中で、音楽を愛好する者が集い、名士を招聘し演奏会を開催できる組織作りへの動きが起こった。最初に組織されたのは「紀伊民報文化事業団」である。この団体は、田辺地方の文化事業を推進するために1958（昭和33）年4月⁷に『紀伊民報』を刊行していた同社内に結成されたものである。「紀伊民報文化事業団」は非営利団体として、純粹に田辺地方の文化活動を発展させていくことのみを目的として活動した。そして、この組織が取り扱った分野は音楽だけではなく、演劇、

諸展示会や講演会など他の領域の主催・後援も幅広く行っていた。例えば、「ステレオコンサート、文芸春秋講演会(井上靖、柴田錬三郎、中野好夫等)あやつり人形劇、オペラ『手古奈』の公演」⁸などに参画していた。また、プロ野球の団体観戦などの企画にも積極的に取り組んだようである。

以上のように「紀伊民報文化事業団」が関係したのは純粹に演奏会や音楽関係の企画に限られていたわけではなかったが、この団体の活動により、文化の推進が図られ、音楽もその恩恵に与ったことは確かであった。

2)「田辺勤労者音楽協議会」の誕生

「紀伊民報文化事業団」は、1960(昭和35)年に大きな転機を迎える。事業団の音楽部門を分離し、「田辺勤労者音楽協議会」(以下田辺労音と略)を作る動きが起こったのである。即ち、田辺労音は1960(昭和35)年春に、2年前の1958(昭和33)年4月に発足し活動していた「紀伊民報文化事業団」を母体として新たに誕生したものであった。

田辺労音への申し込み受付は1960(昭和35)年5月23日から一斉に開始されたが、それに先だって、同月19日付けの『紀伊民報』で、田辺労音の設立準備が着々と進んでいることを報じた際に入会方法が初めて伝えられ、同月24日付けの同紙ではその詳細が記載されていた。

申し込み受付が開始されると希望者が殺到し、その状況は、『紀伊民報』に「和歌山に次いで県下二番目に誕生する田辺勤労者音楽協議会(略して田辺労音)は、会員の申込み相次ぎ、既に千名を軽く突破する有様」⁹と報じられた。それは当初の予想を遙かに越えるものであり¹⁰、ついには余りの希望者の多さにやむを得ず会員募集打ち切りにする旨が同紙に掲載される程のものであった¹¹。受付開始から僅か10日間余の間に1000名以上の申込みがあった事実は、田辺地方に居住する人々が、如何にこのような組織の誕生を待ちわびており、音楽鑑賞の機会を望んでいたかを物語るものである。

このように多数の申し込みがありながらやむを得ず募集を早々に打ち切ったために、約500人の入会希望者が入会できない事態となり、『紀伊民報』では、

いち早く定数突破のため、約五百名が入会できず、このため会員証(例会

券共) にプレミアムがついて三百円の高値を呼ぶという物すごい人気となっている¹²。

とも報じられた。つまり、募集開始当初、入会には30円、会費は演奏会ごとに150円程度が必要とされていた会員証や例会券にはプレミアがつき、最終的にはこれらは300円にまで高騰する有様であったのである。

このように募集を打ち切らなくてはならなかった背景には、当時の田辺における演奏会場の問題があった。この当時、田辺近辺には演奏会を開催できる会場がなく、代わりに使われていたのは、和歌山県立田辺高等学校（以下田辺高校と略）や田辺市立田辺第一小学校（以下第一小学校と略）などの体育館や講堂であった。本稿の研究過程でインタビューをお願いした原盾二郎氏（以下敬称略）によれば、各々の当時の収容人数は田辺高校の体育館が1000人弱、第一小学校が300人程度であった。これらの施設の収容人数は、当然、田辺労音の会員数を充足できるものではなかった。

このように会員証にプレミアがつくほどの大盛況で始まった田辺労音は、その後、精力的に演奏会を主催し、田辺労音のそもそもの母体であった『紀伊民報』にもその活動の様子は詳細に報道されていた。表1) は田辺労音が発足した1960（昭和35）年6月19日から1965（昭和40）年12月31日までの間に、『紀伊民報』の田辺労音主催演奏会に関する記事の掲載回数を示したものである。

表1) 『紀伊民報』の田辺労音主催演奏会に関する記事掲載回数

(単位：回)

	1960年 (昭和35年)	1961年 (昭和36年)	1962年 (昭和37年)	1963年 (昭和38年)	1964年 (昭和39年)	1965年 (昭和40年)
掲載回数	22	45	17	15	14	17

※ただし、1960（昭和35）年については、田辺労音発足前の1月1日から6月18日の期間は含まれていない。

表1)を見ると、『紀伊民報』による掲載回数は、1960（昭和35）年は約半年間で22回、翌1961（昭和36）年は45回に上っている。田辺労音発足後1年半の期間の記事掲載回数の多さから、発足当初、『紀伊民報』がこの田辺労音の活動に如何に力を注いでいたかを窺い知ることができる。この状況は「一九六一年は田辺の音楽史上また発足二年目を迎えた田辺労音にとつても画期的なものとなり、労音ブームの年でもあつた。」¹³とまで表現されていた。

加えて、記事掲載回数だけではなくその内容からも当時、『紀伊民報』が演奏会に関する記事にかなり力を入れており、紙面を割いていたことが分る。例えば、五十嵐喜芳の演奏会¹⁴が開催された際には、単に演奏会の広告だけではなく、当時、東陽中学校の教諭であった神谷慧が五十嵐喜芳について語る記事を掲載したり¹⁵、1面をほとんど割いて五十嵐喜芳の特集記事を組むことも含めて、何回かにわたって関連記事が載せられていた¹⁶。つまり当時、『紀伊民報』が単なる宣伝に留まらず、積極的に音楽に関する知識を供与する役割も担っていたことが明らかである。このように、田辺労音が行ってきた演奏会や、その母体であった『紀伊民報』が田辺労音に関する報道を重ねてきたことは、この当時の田辺地方住民の音楽文化に対する意識を向上させ、音楽文化の良き受容者を育成していく一端を担っていたと言える。

3. 1960年前後の田辺地方における音楽教育

1) 合唱活動の隆盛と学校音楽コンクールでの活躍

田辺地方は戦後一貫して音楽、ことに合唱活動が大変盛んな地域として知られてきた。毎年行われる学校音楽コンクールの和歌山県大会においても、常に好成績を収めつづけてきている。特に小学校においては、合唱活動をする学校が減ってきている現在においても、和歌山県大会への出場校の半数以上が田辺地方の小学校であるなど、その傾向は顕著である。このような現況の素地は、田辺労音が発足し、様々な内容の演奏会を主催していた当時から作られ始めていた。

表2)は、『紀伊民報』の記事に基づいて、1960(昭和35)年から1965(昭和40)年の期間に、NHK全国学校音楽コンクールにおいて県代表に選ばれた田辺地方の学校名を一覧表にしたものである。

この表によるとこの6年間を通して、小学校の部門では、1年も他の地方が代表となったことはなく田辺地方の学校が独占していた状況が明らかである。小学校の部門で県代表に選ばれたのはいずれも田辺市立の、第一小学校、第二小学校、第三小学校の3校であった。中学校の部門では、1962(昭和37)年と1963(昭和38)年を除いては田辺市立東陽中学校が代表に選ばれた¹⁷。高

表 2) NHK全国学校音楽コンクール県代表校選出の田辺地方各校名一覧

年度	小学校	中学校	高等学校
1960 (昭和35) 年	田辺市立田辺第一小学校	田辺市立東陽中学校	和歌山県立田辺高等学校
1961 (昭和36) 年	田辺市立田辺第三小学校	田辺市立東陽中学校	
1962 (昭和37) 年	田辺市立田辺第一小学校		
1963 (昭和38) 年	田辺市立田辺第一小学校		
1964 (昭和39) 年	田辺市立田辺第二小学校	田辺市立東陽中学校	
1965 (昭和40) 年	田辺市立田辺第一小学校	田辺市立東陽中学校	和歌山県立田辺高等学校

『紀伊民報』掲載記事より作成

等学校の部門では、1962 (昭和37) 年に和歌山県立田辺高等学校が初めて優勝して代表になった以降は、この期間中、代表に選ばれ続けている。

このように、田辺地方の学校が毎年のように学校音楽コンクールで好成績を収め、1965年度のように全ての学校部門で優勝を独占したことは、一つには先述の田辺労音が中心となった地域住民の音楽文化育成活動の成果の現れではないかと推察される。

2) 音楽文化の中心として機能した学校

①コンサート会場としての学校講堂・体育館

1960年代の田辺地方ではまだ音楽会を開催できる会場設備がなく、田辺労音主催の音楽会も近隣の学校の講堂や体育館を使用していたことは先述の通りである。その意味で、田辺地方における音楽文化発展にこれら第一小学校講堂と田辺高校体育館が果たした役割は大きかった。

このうち第一小学校の講堂は、1951 (昭和26) 年頃、老朽化が進み、また児童数に対する講堂の狭さも問題となり、保護者の間から鉄筋コンクリートの講堂建設に向けての気運が高まってきた。新しい講堂建設への最初の動きは1951 (昭和26) 年12月に市議会に改築の請願書が提出されたことであったが、その時は、市の財政的な事情で採択されなかった。その後も関係者は精力的に活動し、翌年4月に「講堂本館建設準備委員会」を開き、6月に「講堂本館建設促進後援会」と改称、そして10月には市議会に於いて満場一致で採択され、建設が決定した¹⁸。とはいえ、建設に必要な費用の全額を行政が負担してくれる訳ではなかったため、

工費概算二千万円の中地元負担金七〇〇万円は四ヶ年計画で寄附金を積立てる事に話がまとまり、父兄、一般の皆様卒業生各位の深き御理解と絶大な御協力の下に尊き寄附金が日を追うて寄せられ始めました¹⁹。

というように、父兄や一般住民の理解と協力があったことを当時の校長であった田中吉右衛門が明らかにしている。

このようにして1954(昭和29)年12月に落成式を迎えた講堂は²⁰、当時近畿一の設備を誇るものであった。『紀伊民報』によれば、

約三千万円を投じた近畿一をほこる田辺第一校の講堂が竣工、十九日落成式をあげる、この講堂は鉄筋一部三階、二階建てで二階は千数百人収容出来る大講堂、階下は校長室、職員室、衛生室等にわかれている、講堂は音楽効果の面に万全を期し、周囲の用壁や天井に特別措置が施され舞台は円形で面方の隅から花道が出たり照明設備も完備し正に近畿一の講堂に恥かしくない設備となつている²¹。

というものであった。このように、新しい講堂は2階建てで、1階には校長室、職員室などがあり、2階が講堂になっていたのである。講堂は「音楽効果の面」ですぐれており、「花道が出たり」、照明設備も完備されていた。このように地域住民が新しい講堂の建設に協力的に活動した背景には、教育に対する関心が高かったのに加えて、第一小学校の講堂が地域社会において文化活動に用いられていた事実がある。第一小学校の百周年記念誌にも「学校教育は云うに及ばず、一般社会文化方面に活用されて今日に至っている。」²²と記載されている。

一方、田辺高校の体育館も、教育に使用する一面と、地域社会における文化活動の会場としての両面を併せ持っていた。原盾二郎もインタビューの中で、地域には今のような文化会館がないものだから、公演の場として体育館が使われていたために、「田辺高校の会場のピアノをちゃんとして欲しい」といった声も大きかったのでしょう²³。

と、田辺高校の体育館が各種の「公演の場」として使用されていたことを述べている。また、この当時の田辺高校にはフルコンサートピアノがあったが、当時、和歌山県下でフルコンサートピアノを有していたのは和歌山県民文化会館と同校だけであったことは大変興味深い。これは原のコメントにもある

「『田辺高校の会場のピアノをちゃんとして欲しい』といった声も大きかった」ことを裏付けると共に、田辺地方にとって田辺高校の体育館が、和歌山市における県民文化会館にも匹敵する機能があったことを示しているものである。

このように、当時の田辺地方においては、学校の講堂や体育館が公共の文化施設の代替的な役割を果たしていたのであった。

②音楽文化発展に寄与した教師の存在

1. 原盾二郎の事例

原盾二郎は1960（昭和35）年4月に田辺高校へ赴任以降、現在に至るまで、田辺地方の音楽文化発展にさまざまな功績を残してきた人物である。

赴任当時の田辺高校の合唱部は、現在のようにコンクールで活躍はしていなかったが、部の活動自体は盛んであった。原は、高校での合唱活動を芸術として捉え、ただ集まって歌うだけでは意味がないとし、扱う曲にもより芸術的なものを取り入れて、部の活動の在り方を改革しようと試みた。

また、原は小学校・中学校・高校の連携を図るために、近隣の各校が日帰りで田辺高校の合宿に参加する企画をしたり、田辺高校の定期演奏会であるクリスマスコンサートに出演してもらうことを行った。これらの活動について原はインタビューの中で、

12月になってクリスマスコンサート、小学校の子ども達にとってはそれが1つの夢だったんですね。田辺高校生と一緒に、大体200人くらいで、聖夜を歌ったりとかジングルベル歌ったりだとかね。衣装着て、そこで何でも無いことだけれども、ロウソク1本持たして歌わせることに子ども達のなんか夢みたいなものがあったと思います。ですから、そういう子が、田辺高校に入ってきたら、合唱部入りたいってどんどん合唱部が増えるばかりだったんですね²⁴。

と述べている。高校生と練習や交流をして、その成果が12月のクリスマスコンサートに集約される仕組みであった。小学校の子ども達にとって、高校生と一緒に行なう合唱活動は魅力的であった筈であり、この体験がきっかけとなり、高校生となった時に合唱部に入り、今度は自分達が先頭に立って下級

生に合唱活動の楽しさを伝えていくというこの地方独自の連関が自然と生まれてきたようである。原がこのように高校に在職しながら、小学校・中学校・高等学校の連携をとり、子ども達が自然に合唱活動を継続できる道を作ったことは田辺の音楽文化の発展にとって大変意義のあることであった。

2. 宮本みどりの事例

宮本みどり氏（以下敬称略）は、1995（平成7）年に田辺市立田辺第一小学校を退職するまで田辺地方の小・中学校で42年間指導しつづけてきた人物である。

宮本の自著に書かれている「苦しかったけれど、歌う楽しさに目覚め、練習を続ける中で、いろんな思い出が残ったし、今振り返って良かったと思う。最優秀でなくても、精一杯良い演奏ができて満足だねと喜び合えたら、それでいい」²⁵という言葉には、宮本の音楽教育理念が集約されている。音楽することの喜びを学ばせ、コンクールで1番にならなくても自分達が「精一杯良い演奏ができて」²⁶、喜びを分かち合えることに意義を感じさせようという姿勢が読み取られる。そして、その根幹には「大事なことは苦しみや喜びを分かち合う中で、心を通わせる良き友や、人間関係を作っていくこと、『人を愛すること』」²⁷とする教育者としての視点が大前提としてあると考えられる。

宮本は、自身が小学校や中学校に在職し合唱部の指導を受け持ったとき、神谷慧をはじめ田辺地方のさまざまな先生に指導してもらったことを自著の中に記録している。さらに宮本は、「兵庫県、三重県、その他いろんな学校や研究会に招かれて合唱指導をさせていただきました」²⁸とあるように県外の指導者達とも積極的な交流を心がけていたようであった。このような宮本の、地域の内外を問わない交流は、田辺地方の音楽教育にとって大きな糧となったと考えられる。

4. オペラ「手古奈」の上演

1) 田辺におけるオペラ「手古奈」上演

①上演に至る経緯

1960（昭和35）年9月18日の日曜日に、田辺地方では初めてとなるオペラ

が田辺高校体育館で上演された²⁹。上演演目は「手古奈」であった。

オペラのタイトルになっている「手古奈」とは、物語の中に出てくる少女の名前であり、万葉集に登場する美しい乙女のことである。このオペラの内容は、『紀伊民報』で「美女手古奈巡る 万葉の悲恋物語」と題して次のように要約して紹介されている。

真間の手古奈—とは万葉集に出てくる美しき乙女の物語=手古奈とは「蝶」の意味という。万葉の昔、ヒナにはまれな美少女「手古奈」は、村の若者たちの憧れの的であつた。思いこがれてプロポーズする若者たち、平和な村の仲よく暮らしている若者たちの間に、たゞならぬ波瀾、「手古奈を独占するのは心苦しい」として一人の若者が手古奈をあきらめて村を去つて行つた。このショックで世をはかなんだ手古奈は夢多き青春を、入水して閉じるという悲恋の物語である³⁰。

この引用記事にあるように、物語は万葉集に登場する美少女・手古奈をヒロインとしたもので、最後は彼女が入水自殺を図ることで幕を閉じる悲恋物語である。『紀伊民報』において物語の内容について触れられたのはこの記事が初めてであるが、資料1)のように、台詞が全て書かれた台本が第1面を費やして掲載された。

資料1)『紀伊民報』掲載の「歌劇手古奈」台本

(1) 昭和35年9月16日 第4325号 日刊

紀伊民報

歌劇手古奈公演

万葉の美女手古奈

あわき月の光りに

花香る野辺に

「真間」のほとり
楽しく続く交りよ

（以下、台詞本文）

(『紀伊民報』第4325号 1960(昭和35)年9月16日)(新聞紙面後段3段分は省略)

この「手古奈」上演には、先にも述べたように、地方にもオペラを普及させようという文部省の意図があり、同省の委嘱で公演が決定したものである。

『紀伊民報』では、

オラペ(ママ)と言えは数少ない日本では先ず「夕鶴」「黒船」「修善寺物語」が代表的なもの、がいずれも玄人にしか出演の出来ぬ、また、職業的音楽家(ママ)した演奏出来ないので一般には近(ママ)よいがたい、それだけに馴染みの薄いものだつた。これでは日本にオペラは芽生えない—と文部省社会教育局芸術課に青少年音楽協会□設けられ、青少年のためのオペラ・シリーズ第一作として誕生したのが、近く上演される真間の「手古奈」である³¹。

と報道されたが、この記事は少なくとも田辺地方においてオペラが日常とはかけ離れたものであると言う認識が一般的であったことを示している。また、「近(ママ)よいがたい」という表現から、オペラというものが、音楽を専門としていない大多数の人々にとって、別世界のものという認識であったことが読み取れる。

このようなオペラとはほとんど疎遠であった田辺地方の人々に、「手古奈」が「青少年のためのオペラ・シリーズ第一作として誕生した」と説くこの記事は、上演への期待を大いに駆り立てるものであったと推察される。『紀伊民報』の記事は、

これによつてオペラが広く一般に普及の糸口を与えることにもなりプロに限られていたオペラが、音楽愛好家の手によつて上演可能となつた。これを田辺地方の人々の手によつて上演しようとするものである³²。

と続けているが、これは、「プロ」ではなく「田辺地方の人々の手によつて上演する」ことで、自分たちにとって身近な存在であることを印象づけるねらいが感じられる記事であり、オペラを自分たちの生活と切り離して考えるのではなく、もっと身近なものにしていくべきであるという報道側の意図も感じられる。

表3)に「手古奈」上演時のメンバー表を示すが、この表からも、オペラを身近なものにしようとする目的が明確に読み取られる。即ち、出演者の中心は田辺地方の学校の教師、またその学校の生徒、加えて田辺地方で勤務しながら音楽に携わっている人たちであった。主役の「くず人」「あぜ彦」を演

じたのは、各々、東陽中学校と田辺高校で教鞭をとっていた神谷慧と原盾二郎であり、他の配役の殆どが田辺地方の各校の教員、或いは生徒で占められていた。さらには、田辺高校の合唱団やブラスバンドも参加していた。

オペラは日常生活とは接点を持たぬもので、その出演者も専門的に音楽を学んでいる人という認識が一般的な社会の中で、自分の居住する地域でオペラが公演され、なおかつ出演者が田辺地方住民となれば、これは一般市民にとって大きな出来事であったに違いない。こうしたオペラの上演の在り方は、専門家による本格的なオペラ上演にも勝る人々の関心事となったと推察される。

表3) オペラ『手古奈』上演のメンバー表

ス タ ッ フ		配 役		合唱・管弦楽	
指 導	文部省 小林源治	く ず 人	神谷慧(東陽中)	合 唱	田辺高校合唱団30名(梅田茂二)
製 作	森内富三郎	鹿 丸	内田文夫(三舞中)		田辺グリークラブ(男声合唱)
編 曲	角 莊三、山本章	鈴 石	真砂久哉(同志社OB)	管 弦 楽	森内氏
指 揮	角 莊三	あ ぜ 彦	原盾二郎(田高)		岩谷氏
舞台装置	小川利幸	行 磨	西子男(田並中)		尾崎氏
装 置	紀伊民報文化事業団	家 来	上田喬彬(栗栖川中)		岸田氏
照 明		は ま 児	深見幸子(第三相銀)		広瀬氏
宣伝契□	井沢良雄		中西浩子(田一小)		小森氏
衣 装	岩□裕隆	い ら 児	桑原真紀子(高雄中)		金崎氏
小 道 具	小川利幸		柏本文子(田高生徒)		鈴木氏(秋津)
管 弦 楽	田辺好楽会管弦楽団	や じ 児	鈴木美代(田三小)		中道氏
			佐々木容子(紀南高看)		三栖氏
演 出	岩□裕隆	手 古 奈	中西浩子(田一小)		楠本氏(白浜)ほか
			深見幸子(第三相銀)		田辺高校ブラスバンド

(『紀伊民報』第4301号 1960(昭和35)年8月21日記事より作成)

②「田辺勤労者音楽協議会」(田辺労音)の支援を受けたオペラ上演

「手古奈」の上演には「紀伊民報文化事業団」と、そこから組織された田辺労音も積極的に参加していた。「手古奈」の企画開始以降に発足した田辺労音は、その主催する9月例会を休会して「手古奈」に力を注いでおり、「手古奈」上演は、田辺労音に支えられていたといっても過言ではないほどであった。『紀伊民報』によれば、

この催しは田辺労音結成前の企画であるため、労音として正式参画を決めるに至らなかったが、上演者はいずれも労音会員や運営委員であり労音の

音楽創造や地方におけるオペラ開拓の目的に合するため労音例会と重ならぬよう九月例会を休会としたのも、オペラに協力するためでもあつたので、九月例会の代りとしてこのオペラ手古奈に積極的に協力するよう事務局では、労音会員に呼びかけている³³。

ということであり、田辺労音がこの公演に如何に大きな比重をかけていたかが明らかである。

このように、田辺労音も例会を休会してまで「オペラ手古奈に積極的に協力」した結果、この「手古奈」の上演は、「音楽創造や地方におけるオペラ開拓」³⁴の目的に一石を投じることになった。

紀伊民報社としては、自社の中に田辺文化に貢献しようと活動している組織があれば、その活動を積極的に報道しようとすることは当然のことであるが、この「紀伊民報文化事業団」とその後の「田辺労音」が同社の中に組織されていたことは、オペラ『手古奈』上演にとっても幸運であったと言える。

『紀伊民報』では、オペラ上演に至る過程が、表4)のように詳細に報じられていたが、このような『紀伊民報』という地元の新聞を通した広報活動は、田辺地方で初となるオペラの上演に対する人々の理解と期待をますます高めるものであったと推察される。

表4)『紀伊民報』掲載のオペラ『手古奈』関連記事

年月日	号	面	見出し
1960(昭和35)年8月21日	4301号	1面	画期的な催しもの 夏休み返上して猛稽古「好楽会」を中心として
1960(昭和35)年9月7日	4316号	2面	歌劇手古奈公演 万葉の美女手古奈の悲恋物語 音楽人が一致団結して
1960(昭和35)年9月8日	4317号	2面	実現した合同練習 音楽部員も仲よしに 市内五校が「壁」破る
1960(昭和35)年9月11日	4320号	1面	(公演の宣伝)
1960(昭和35)年9月21日	4325号	1面	歌劇手古奈公演(台本)
1960(昭和35)年9月17日	4326号	2面	期待の歌劇手古奈 ピアノ、木琴の特別演奏も いよいよ18日夜田高で
1960(昭和35)年9月18日	4327号	2面	歌劇手古奈公演 舞台装置は日本一 全篇つらぬく哀愁のメロディー いよいよ18日夜田高で

上記期間発刊の『紀伊民報』記事より作成

2) オペラ上演の中心的人物への聞き取りからの考察

オペラ「手古奈」は田辺地方の人々が一丸となって公演したものであった。そこで、当時、田辺高校に在職し、「手古奈」上演の際、「あぜ彦」を演じた原に、上演に関するインタビューを行なった。原は、同役を引受けるに至った経緯を次のように語っている。

僕が来たときによく知っていた先生が中心になってやっていたんで、「こんなやるんでちょっと来てくれない」と言われて行っただけです。私は、田辺の方に住まいもしてなかったんで、御坊から片道、汽車で2時間かかって通っていたので、初めはやる気はなかったんです。だけど、仲よくしていきこうと思い、誘われたので「ありがとう」と言って行っただけです。そこで「ちょっと歌ってみてくれない」と言われて、歌ってみたらみんなに評判がよくって、『手古奈』の主演をやってくれと言われたんです。なんだからもう雲を掴むような感じで、もう前に出ないで「仕方ないな」と思ってやったのがきっかけでした。そのときは合唱には田辺高校が少しは入りましたけどね³⁵。

当時、御坊から田辺高校へ勤務していた原は、当初は参加に積極的ではなかったが、中心となっていた先生からの呼びかけもあり、参加することを決意したと述べている。そして、「手古奈」には原が指導する田辺高校合唱部も正式に合唱パートに参加していた。一方、小中学生の参加に関しては、

基本的にはそういう合唱は出てないね。ただ、オーケストラは地方のいわゆるもう、吹奏楽あがりのオーケストラでしたが、その中でトランペット吹いたりだとか、ヴァイオリン弾いてる人とか、個人的にはそういう子ども達も参加していました。田舎なりのオーケストラを作って、その『手古奈』っていうオペラをやったんです³⁶。

として、学校レベルでの参加はなかったが、合奏の中で一部、個人的に子どもの参加があったことも示唆している。

また、この公演が文部省委嘱公演であったために、文部省の指導を受けたことについての質問には、

こちらの総監督をしていたのは、昨年か一昨年教育長を辞められた角莊三さんでした。彼が指導者として、いろいろ交渉とか、公演のための練習と

か全部取り仕切ってやってたんです。小林という文部次官や、演劇の専門家が田辺へ公演までに2、3回来て、指導してもらったことがあります³⁷。と、答えている。この原の述懐から、『紀伊民報』には、「指導」として報じられた文部省の小林源治が2、3回、田辺に来て指導したこと、そして、実質的には角莊三が総監督的な立場で、この上演を取り仕切っていたことが明らかとなった。こうした上演の在り方は、地方に音楽文化を根付かせるという文部省のオペラ創作当初の意図がうまく具現化されたものであると言える。

ところで、後述するように、「手古奈」の公演以降、教師間が親密になり学校を越えて合同で合唱練習をするようになったという記事が『紀伊民報』に見られたことを伝えたところ、原は、

それは、そういうのも一つやね。さっきも言ったように、『手古奈』上演は小・中の先生方が中心でした。そういった方々が中心となり、私も入り、一般社会の人も入ってました。もちろん労音の方の協力もあり、オペラですから演劇や舞台関係は全部労音が引き受けてやってくれました。合唱は田辺高校と一般市民、役がついてる人は田辺地方の音楽の先生が中心でした。もう大変でしたよ。今から思えば、よくやったなと思います。もう勤務終わってから夜の練習ばかりですからね。それでもまあよくやれたと思っていますよ³⁸。

と述べている。この原の言葉からは、教師達を中心に一般社会の人々も協力して「手古奈」を創り上げていった様子が如実に伝わってくる。さらに、原は、

いろいろな人の協力を得てね。ただ音楽の先生だけの協力だけではなく、もう一般の方々でも、例えば紀伊民報（社）にも大変お世話になってると思います。（中略）紀伊民報社の中にある労音というのがね、その当時の田辺を支えてましたね。もうほんとにボランティアですけどね。結構田辺には昔からそういうようなことを勉強されて、大学を出て田辺に帰ってきて、仕事をしながらボランティア活動をしてくれてた人もたくさんいるのですよ。特に舞台関係の人ではそうでしたね³⁹。

とも述べている。この原の発言からは、「手古奈」が学校、社会、田辺労音が

一体となって創りあげられたものであることと共に、改めて『紀伊民報』の影響力が大きかったことが確認される。

3) 「手古奈」上演が及した影響

以上のような考察を通して、オペラ「手古奈」の上演は、田辺地方で初のオペラ上演を実現させたということ以上に、『紀伊民報』というメディアをも巻き込んで田辺地方における音楽活動に関わる人々を一体化させ、その後の音楽文化の発展の礎を築いたという点で、より大きな影響を及したと考えられる。

『紀伊民報』では、「手古奈」の上演に至る状況に関して、

地方音楽人を大動員してのオペラ「手古奈」によつて、音楽人が一つになつての練習から、今までバラバラになつていた各学校の先生たちの精神的な結びつきが目立ち大きな成果をあげている。NHK学校音楽コンクールは近く新宮市で開れるが、今までは田辺市内の各学校は、練習を学校毎にやつてお互いに公開することなく競争的行われてきた。これがオペラ手古奈を機に、各学校廻りもちで練習を他校の先生にみてもらい、遠慮のない批判をしてもらつて、今後の参考とするなど、お互いが仲よく磨き合つて練習に励むようになり、教育的にも大きな成果を上げている⁴⁰。

と報じられていた。

「手古奈」上演という目的のもとに、田辺地方の人たちが一致団結して練習に励んだために、練習を重ねるたびに出演者たちの間に「精神的な結びつき」が形成されていったと言うのであるが、これが田辺地方全体の音楽文化の飛躍につながったのであろう。さらにこの新聞記事の翌日には、各校による合唱の合同練習の様子が、次のように詳細に報じられてもいた。

NHK音楽コンクール紀南地区予選は十日新宮市で開かれるが、これに先立ち六日午後一時より田辺第二小学校講堂で大阪教育音楽研究会の丸谷吉清氏を迎えて合同練習を行つた。第一、二、三の各小学校と東陽、高雄両中学音楽部員が熱心に指導を受けた。今までは競争的に独自で練習していたものが「手古奈」を機に音楽の先生たちが特別親しくなり、今までの「壁」を排除して互いに批判しあつて練習に励むこととなつたものこのため練習

する良い子たちも他校の良い子と顔見知りとなり仲よく舞台練習を待つという微笑ましい風景を見せ、関係者を喜ばしている⁴¹。

この記事から、「手古奈」に出演した田辺地方の教師たちの関係が親密になり、結果として音楽部及び合唱部が「学校」という枠組みを越えて合同練習に至ったことが読み取られる。

「手古奈」の上演以前にも、田辺地方では合唱が盛んでありコンクールにおいてもよい結果を残し続けていたのであるが、この記事で「競争的」という言葉で表現されていることに注目すれば、いわゆる「良い賞」を獲得することが目的化していた可能性も否めない。しかし、少なくとも、「手古奈」の上演の結果、教師同士が学校を越えて交流を図ろうとし、互いに良い意味で磨き合おうとしていたようである。このような教師の互いに磨き合おうという姿勢は、田辺地方にとって音楽教育的にも非常に大きな成果を挙げることになったと考えられる。

5. おわりに

以上、考察してきたように、1960年代の田辺地方では文部省の創作オペラ「手古奈」上演を契機として、地元の音楽活動に関わる人々の間に良い連携が生れていた。それは戦後、この地方の人々の間に芽生えていた文化の発展を希求する気持ちを礎としたものであった。加えて『紀伊民報』を母体とする「紀伊民報文化事業団」や「県下二番目に誕生」した田辺労音が、多くの住民の支持を得て積極的に地域の文化活動を推進したことによっている。そして、オペラ「手古奈」の上演をきっかけとして生れた学校という垣根を越えた音楽教師の交流は、互いに刺激を与えつつ切磋琢磨することでこの地方の音楽活動、とりわけ合唱活動を発展させることとなった。当時のこうした活動は、現在に至ってなお、この地方の合唱活動を支えるものとなっている。

これは、創作オペラ活動を開始するにあたって文部省が意図した、地方の青少年の音楽文化育成の、望ましい姿の一つである。この1960年代に見られた田辺地方の、学校と地域が一体となった音楽活動の在り方は、ともすれば地域間格差が広がりがちな音楽文化の発展にとって、考えるべき多くの示唆

を与えてくれるものである。

謝辞

本研究をまとめるにあたって原盾二郎先生と宮本みどり先生から長時間にわたって当時の様子を伺う貴重な機会を得ることができました。お二人の先生に深く感謝申し上げます。

註

- 1) 小林源治「青少年のための歌劇『手古奈』」『教育音楽』第10巻第8号 1955（昭和30）年8月
- 2) オペラ「手古奈」の創作及び普及過程については、嶋田由美「青少年音楽文化育成活動としてのオペラ『手古奈』の創作に関する考察」（和歌山大学教育学部『教育実践総合センター紀要』No.16 2006（平成18）年8月）を参照。
- 3) 「“文部省オペラ”に人気」『朝日新聞』第26405号 1959（昭和34）年7月27日（月）第9面 記事の中に和歌山にも「青少年オペラ研究会」が誕生した旨の記述があるが、今回の研究では当時の和歌山県内におけるこの会の存在を明らかにできなかった。
- 4) 田辺市編『田辺市誌 下巻』1982（昭和57）年 大和学芸図書株式会社 p.541
- 5) 同上。
- 6) 同上。p.542
- 7) この年月は『紀伊民報』（第4187号 1960（昭和35）年4月24日）によったが、前掲書の『田辺市誌 下巻』によると1956（昭和31）年5月となっている。これは、実質的な活動開始の年月と「紀伊民報文化事業団」という名称の下で活動を開始した年月のどちらを結成された日として捉えたかによる相違であると考えられる。
- 8) 註4）に同じ。p.542
- 9) 「懸下二番目の田辺労音 既に会員千名突破 機動的に音楽会を運営」『紀伊民報』第4223号 1960（昭和35）年6月2日
- 10) 「予想越える会員数 近日中に入会受付を打ち切り 期待される第一回例会」『紀伊民報』第4233号 1960（昭和35）年6月12日
- 11) 「会員募集を打切る 予定数突破の田辺労音」『紀伊民報』第4235号 1960（昭和35）年6月14日
- 12) 「開場は5時10分から 必ず会員証と例会券を」『紀伊民報』第4239号 1960（昭和35）

年 6 月18日

- 13) 『紀伊民報』第4778号 1961 (昭和36) 年12月30日
- 14) 1960 (昭和35) 年 7 月13日 田辺高等学校に於て開催。(『紀伊民報』第4264号 1960 (昭和35) 年 7 月13日参照。)
- 15) 「五十嵐喜芳さんを語る 神谷慧」『紀伊民報』第4261号 1960 (昭和35) 年 7 月10日
- 16) 五十嵐喜芳の演奏会の前後、約 3 週間の間に『紀伊民報』にはこの演奏会関連の記事が計 9 回、掲載されている。
- 17) 田辺市立東陽中学校が代表にならなかった 2 年間は和歌山市立伏虎中学校が代表となっている。
- 18) 田辺第一小学校創立百周年記念事業委員会編『百周年記念誌 錦水』1978 (昭和53) 年 田辺市立田辺第一小学校発行 p.108
- 19) 田辺第一小学校育友会錦水保存特別委員会編『縮刷版 錦水「育友会報」二百号の歩み』1984 (昭和59) 年 田辺市立田辺第一小学校育友会発行 p.161参照。
- 20) 註18) に同じ。 p.109
- 21) 『紀伊民報』第2309号 1954 (昭和29) 年12月17日
- 22) 註20) に同じ。
- 23) 原盾二郎氏へのインタビューより。インタビューは2006 (平成18) 年 1 月 6 日及び15日に原氏のご自宅で行なわれた。
- 24) 同上。
- 25) 宮本みどり『小さな花たちのコーラス』2003 (平成15) 年 私家版 p.297
- 26) 同上。
- 27) 同上。
- 28) 同上。 p.306
- 29) 『紀伊民報』第4326号 1960 (昭和35) 年 9 月17日
- 30) 『紀伊民報』第4301号 1960 (昭和35) 年 8 月21日
- 31) 同上。
- 32) 同上。
- 33) 『紀伊民報』第4316号 1960 (昭和35) 年 9 月 7 日
- 34) 同上。
- 35) 註23) に同じ。

- 36) 同上。
- 37) 同上。
- 38) 同上。
- 39) 同上。
- 40) 註33) に同じ。
- 41) 『紀伊民報』第4317号 1960（昭和35）年9月8日